

目次

はじめに	i	松田真希子
第1章	南米日系日本語教育の創造性と多様性	1
		松田真希子
第2章	ケイショウゴ教育の変遷について —オーストラリアとブラジルを例に—	18
		トムソン木下千尋
第3章	「違い」の感覚を生きる	31
		福島青史、長谷川アレサンドラ美雪
COLUMN 1	新しい視点から見えてきたこと	44
		松崎かおり
第4章	多様化社会のファミリー・ランゲージ・ポリシー	46
		伊澤明香
第5章	日系4世の継承語・文化保持の可能性	60
		坂本光代
第6章	ニッケイ・アイデンティティについて考える	75
		水上貴雄
第7章	スタイル万能神話の崩壊 —状況に応じて、話す言語に応じて、人間（キャラ）が 非意図的に変わるということ—	89
		定延利之

第 8 章	自分のことばをつくっていく意味	104	三輪聖
第 9 章	CLD 児のことばの可視化と全人的教育	119	中島永倫子、櫻井千穂
COLUMN 2	離れて眺めて、混ざる良さに気づく	133	サウセド金城晃アレックス
第 10 章	日系ブラジル人にとっての「日本」、 そして「郷土」	135	中井精一
第 11 章	ブラジルに根をはる俳句・ハイカイ	151	白石佳和
第 12 章	ボリビア日系社会の言語接触と混合言語	164	ダニエル・ロング
COLUMN 3	“Why me?” —なぜ私がシドニーにいるか—	179	寺本不二子
第 13 章	昆布に分散化されたアイデンティティ	187	尾辻恵美
第 14 章	さまよ 彷徨える文化、言語、アイデンティティ	203	岡田浩樹
おわりに		218	坂本光代・中井精一・松田真希子
索引		222	
著者紹介		226	

第 1 章

南米日系日本語教育の 創造性と多様性

松田真希子

キーワード

教育的トランスランゲージング (TLP)、ZPD、コミュニティ活動、EGIDS

1 はじめに

20 世紀初頭から半ばにかけて、日本政府の移住支援を受けて南米大陸で集団移住が行われた南米大陸では、1910 年代から日本語教育が行われてきました (Moriwaki & Nakata, 2008)。初期の日系移民はまず日本人会を結成し、直後に子どもの教育のための学校を開きました。その後、会館、病院、農協などが徐々に組織化され、コミュニティ (移住地) が整備されていきました。今でも多くの日系移住地では、日本語学校や体育館などの文化体育施設が維持されています (写真 1、写真 2)。そして南米には政府公認の日系の小中学校も数多く、日本語学校の生徒は日系 4 世～5 世が中心となり、そこでは非日系の学習者も増えています。



写真 1 パラグアイピラポ移住地
航空写真 (ピラポ資料館所蔵)



写真 2 ピラポ日本語学校
(2017 年 11 月筆者撮影)

第2章

ケイショウゴ教育の変遷 について

—オーストラリアとブラジルを例に—

トムソン木下千尋

キーワード

オーストラリア、ライフスタイル移住、繫生語、継承語

1 はじめに—南半球の二つの国—

私は30年近く南半球の国、オーストラリアのシドニーで大学生に日本語を教えてきました。その間、ひとりの母親として「継承語」としての日本語とも関わってきました。日本国外で育つ日本と繋がる子どもたちのことばです。近年、シドニーでも日本と繋がる子どもたちの数が増えていることを体感し、大学のコースにも日本人を親に持つ学生が履修することが多くなってきています。実は、オーストラリアは、在留邦人の数（10万人強）がアメリカ、中国に次いで世界第3位で、日本国籍を持つ永住者の数（6万人弱）に限って見ると、アメリカに次いで世界第2位です（外務省2020a）。オーストラリアは人口が日本の5分の1程度（2千5百万人）（グローバル・ノート2021）の小国であるにもかかわらず、大国のアメリカや中国と在留邦人の数で肩を並べていることになります。

一方、2019年にもう一つの南半球の国、ブラジルを訪れる機会に恵まれました。ブラジルには、日本国外に住む推計280万人の日系人のうち、その過半数（推計150万人）が集中している（山ノ内2014）と言われています。先に挙げたオーストラリアの数字は在留邦人、つまり、日本国籍を持つ人の数ですが、ブラジルの数字は日系人の数です。日系人は、日本国外に本拠地を移し、永住目的で生活している人とその子孫で、日本国籍はなくても日本にルーツを持つ人を含むことになります。ブラジルは移民の歴史が

第3章

「違い」の感覚を生きる

福島青史、長谷川アレサンドラ美雪

キーワード

デュオエスノグラフィー、移動労働者、所属意識、
アイデンティティ、社会構造

1 はじめに（福島）

世界を移動しながら生活する家族は珍しくないかもしれませんが、しかし、今から30年前、1990年ごろの日本では、モデルとなる家族は今ほど多くなかったと思います。少なくとも移動していた当人は、自分がこれからどのような人生を送るのか、はっきりとしたビジョンを持ち得ていませんでした。私たち（福島と長谷川）は、1990年、それぞれ自分の生まれた国を離れました。長谷川さんは、4歳でブラジルのイタペチニングを離れ、その後、日本とブラジルの間を往復します。埼玉、長野、コチア、ソロカバ、群馬、長野、ソロカバ、茨城、そして、23歳の時にソロカバに戻りました。15歳から働きはじめ、働きながら大学を出て、現在日系日本語学校の教師をしています。一方、福島は、22歳で日本を離れ、アメリカ、メキシコ、ウズベキスタン、ロシア、ウズベキスタン、ハンガリー、イギリス、ブラジルと移動し、50歳の時に日本に戻りました。その間、仕事をはじめ、家族を持ち、二人の娘も成人しました。

本章は、長谷川さんのライフヒストリーと、それについて二人が語ったことを記しました。移動を伴う生活には、移動を伴わない人たちが経験しない困難があります。多くの場合、これらの困難は、それぞれの社会が期待することと、移動する個人とのずれに起因します。このずれは完全には修復されることはなく、「違い」の感覚の中で生きることになります。本章では、こ

第4章

多様化社会のファミリー・ランゲージ・ポリシー

伊澤明香

キーワード

ファミリー・ランゲージ・ポリシー、家庭内言語、家庭内言語リソース

1 はじめに

多様な言語文化社会の中で子どもを育てる保護者は、何を考え、何を子どものために実践しているのでしょうか。近年、日本国内でも外国にルーツをもつ子どもたちが増えています。国内では日本語がマジョリティの環境ですが、外国にルーツをもつ子どもたちの母語・継承語を守るにはどうしたら良いのでしょうか。移民社会であるブラジル日系社会からこれらの点を学ぼうとすることが本章の狙いです。

1908年に初めて日本から移民がブラジルへ渡ってから110年以上が経ち、現在のブラジルでは世界最大の日系社会を形成しています。ブラジルの日系社会では、長年にわたり子どもたちのために日本語学校創立など日本語教育を実践してきました（宮尾2002）。行政など公的支援は少なく、移民たちは独自のネットワークの中で協力し合い、どのように日本語能力を身につけていくのかは、家庭での教育戦略に任されていました（平岩2016）。本章では、保護者のファミリー・ランゲージ・ポリシーに着目し保護者へのアンケート調査を通して保護者の子どもへの言語教育観及び日本語に関する意識と子どもたちの家庭での言語使用及び言語環境の実態を明らかにすることを目的としています。

第 5 章

日系4世の継承語・文化保持の可能性

坂本光代

キーワード

日系4世、ブラジル人、アイデンティティ、ナラティブ、
継承語習得・保持

1 はじめに

継承語話者研究に従事して早 20 年以上経つ中、継承語としての日本語は 2 世代で消滅しようという結論に達しました (Sakamoto, 2000, 2001)。英語という権力を持ち備えた言語 (フィリプソン 2013) が主要言語として用いられる環境の中、マイノリティ言語を積極的に学び、保持する必要性を大衆に訴求するのは簡単なことではありません。結果、日本語母語話者である 1 世が家庭で日本語を使用・保持でき、その子ども世代である 2 世はバイリンガルに育つも、その次世代 (3 世) の子育てでは日本語使用の必要性が希薄となります。よって、英語圏の家庭内の使用言語が英語優勢となり、3 世代目は英語モノリンガルに、よくても聞いて理解することはできても発話や作文など産出的な言語活動ができない受容型バイリンガルに育つ可能性が高くなります。その反面、ブラジルでは、2 世はもちろん、3 世、4 世でも日本語を保持できています (Sakamoto & Matsubara Morales, 2016)。移住者は従前自国で培った言語・知識・学歴・職歴などから引き離された「移民」として新たなアイデンティティのもと、新しい土地で新生活を送ることを余儀なくされてきました。これは植民地主義的視座からは、安価な労働力として搾取の対象とされ、自尊心を奪われうることを意味します。しかし、「日本にルーツを持つ人」という頑強なアイデンティティを独自に構築・確立し、知見をつないできた日系ブラジル人は、「移民」というブラジ

第6章

ニッケイ・アイデンティティについて考える

水上貴雄

キーワード

ニッケイ・アイデンティティ、日系社会次世代育成研修
(中学生プログラム)、価値観、日系社会研修

1 はじめに—苦悩からライフワークへ—

私と日系社会との関わりは、1996年3月に始まります。私は、独立行政法人国際協力機構（以下 JICA）が派遣する JICA ボランティア（当時は「海外開発青年」としてブラジルに赴任しました。赴任地はサンパウロに次いで日系人口の多い北パラナのマリアルバという町でした。JICA では、現在でも中南米の日系社会にある日本語学校に JICA 海外協力隊として日本語教師を派遣するなど、日系社会支援の一つの柱として日系社会の日本語教育に対する支援を行っています。1999年3月に帰国して（当時は任期が3年でした）、その年の8月から現在の所属先である海外日系人協会に入職し、日系社会関係の業務に携わってきたので、日系社会との付き合いは気がつけば25年になります。赴任当初、日系社会と私の出会いはこんなに長続きするとは想像できない、あまりよい出会いではありませんでした。それは、私の日本人移住の歴史やニッケイ・コミュニティに関する無知から来る勘違いや、ニッケイ・アイデンティティ、二つの文化を持つことの価値を理解していなかったことが原因でした。日本的な部分とブラジルの部分を持つ「日系ブラジル人」という存在を、頭では理解しながらも、心が理解できずに苦悩したことを今でも時々思い出します。

また、大学の主専攻課程で日本語教育について学んだ私にとって、大学で

第7章

スタイル万能神話の崩壊

—状況に応じて、話す言語に応じて、人間（キャラ）が非意図的に変わるということ—

定延利之

キーワード

スタイル、人格、意図、約束、道具論的言語観

1 はじめに

この論文で私が論じるのは、「人間というものは、状況に応じて、また、話す言語に応じて、非意図的に変わるものだ」ということです。多くの人、特に若者がこのことで苦しんでいます。我々はそれを見過ごしがちで、気づいても無視しがちです。一体どうなっているのでしょうか？

2 自我アイデンティティ

「自分という人間は、これこれこういう人間だ。こういう道を進んで、こうなりたい。生き甲斐はこれ」と、自信を持って答えられる人は、自分というものを社会の中にうまく位置づけられています。こういう状態を「自我アイデンティティが確立できている」(Erickson, 1959, 1968)と言います。しかし、現実には自我アイデンティティの確立は難しそうです。そして日本では、こういう議論に「キャラ」が持ち出されることがあります。「キャラ」とは何でしょう？

3 キャラ

「キャラ」ということばには多くの意味がありますが（定延 2011, 2020,

第8章

自分のことばを つくっていく意味

三輪聖

キーワード

継承日本語、複言語・複文化主義、出自言語教育、わたし語

1 はじめに

ドイツをはじめ、ヨーロッパには移民背景を持つ人たちが多くいます。学校にも移民背景を持つ子どもたちが多く在籍しており、日本に関係のある子どもたちの数も少なくありません。「海外在留児童・生徒数・在外教育施設数」(文部科学省2019)によると、現在17,770人の学齢児童生徒がヨーロッパで生活しています。そして、文部科学省の在外教育施設である日本人学校の在籍者は2,586人、同じく在外教育施設の日本語補習授業校の在籍者数は4,637人にのぼります。つまり、一万人以上の子どもたちが在外教育施設とは異なる現地で運営されている教育施設に通うか、あるいはそのような教育機関には通わないという選択をしていることが見て取れます。後者のように学校に通わないことに決めた家庭の中には、子どもの日本語とどう向き合えばいいかわからず、必死に情報を集めては孤軍奮闘しているケースが多く見られます。そこで、筆者はこのような家庭でのことばの学びを支援できるようなツールを作ることにしました。それが本章で紹介する『わたし語ポートフォリオ』です。

筆者はドイツ補習授業校の現場で教員及び保護者として子どもたちと向き合う機会があったのですが、その際にいろいろなことを考えさせられました。現在、ドイツでは主に2世の子どもたちが、そして徐々に3世の子どもたちも補習授業校に来るようになってきています。この点に関して3世、

第9章

CLD児のことばの可視化 と全人的教育

中島永倫子、櫻井千穂

キーワード

子どもの継承日本語教育、文化的言語的に多様な子ども（CLD児）、
「南米子ども複言語コーパス」

1 はじめに

南米の日本語教育は日本人移住者の子弟教育から始まり、現在でも多くの子どもの学習者がいると言われています。独立行政法人国際交流基金（以下JF）の2018年の機関調査では、南米の日本語学習者数は42,226人で、うち少なくとも三分の一は初等から中等段階の学習者であることが分かりますが、実際に彼らはどんな子どもなのでしょう。ただ外国語を教室の中だけで学習するのではなく、実際の生活の中で複数の文化と言語に触れて育つ子どもたちのことを、文化的言語的に多様な（Culturally and Linguistically Diverse）子どもという意味で、英語の頭文字を取ってCLD児という呼び方で呼ぶことがあります。

筆者（中島）は、日本政府の外郭団体からの派遣により、8年間南米の日本語教育に携わりました。その過程で、日系、日本人を親に持つ、日本で就学経験がある等、様々な背景をもちながら日本語を学習しているCLD児たちに出会いました。また、日本にルーツはないがマンガやアニメへの興味がある等の理由で、外国語としての日本語を学ぶ子どもたちにも出会いました。南米ではこのような子どもたちが一緒に教室で日本語を学んでいます。この子どもたちの「数」はデータ化できますが、ひとりひとりの「人物像」や「背景」、どのような「言語活動」をしているのかを知ることは、容易ではありません。しかし、彼らの教師や支援者にとって、これらの情報を得る

第10章

日系ブラジル人にとっての「日本」、そして「郷土」

中井精一

キーワード

日本祭、県人会、郷土料理、B級グルメ、伝統方言

1 はじめに

南米日系人社会とは、どのような社会なのか。日系人と私たちとは、どこが同じで、どこが違っているのか。以下では、ブラジル日系人社会での調査を通して、彼らにとっての故国や故郷、故国の日本語や故郷の日本語について、社会言語学的観点から分析し、南米日系人社会における「日本」及び「郷土」について考えてみたいと思います。

1908（明治41）年、サントス港に初のブラジル移民791人を乗せた「笠戸丸」が入港してから、110数年が経過しました。彼らの多くは、富をえて、錦の旗を掲げて、日本に帰ることを思う出稼ぎ者でした。ただ第二次世界大戦で日本が敗れたことで、ブラジルを第二の祖国として選ばざるをえない状況に追い込まれたと言います。また敗戦直後の日本は、焦土と化し、今では想像できないようなひどい社会状況で、経済も混乱していました。加えて外地からの引き揚げ及び復員による過剰人口を抱え、戦前にも増して海外への移住が目されるようになりました。例えば、パウリスタ養蚕移民（1953（昭和28）年）、コチア青年移民（1955（昭和30）年）で、多くの農業移民を南米に送り出したのでした（富山県海外移住家族会2011: 44-46）。

移住した人びとはブラジル各地でいくつもの組織を創ったのですが、日本とのつながり深い行事は、「日系5団体」と呼ばれるブラジル日本文化福祉

第 11 章

ブラジルに根をはる 俳句・ハイカイ

白石佳和

キーワード

日系俳句、ブラジル季語、増田恆河、座の文学、オーセンティック

1 はじめに

1.1 ブラジルの和食と俳句

ピラルクーという魚を知っていますか。アマゾン川に棲息する世界最大級の淡水魚です。私は、日系人が経営するサンパウロのレストランで、ピラルクーの刺身を食べたことがあります。とてもおいしかったのですが、ふと気になったのは、これは和食と言えるのだろうか、ということです。「刺身」という料理は日本の文化です。しかし、素材のピラルクーはブラジルのものです。醤油などもブラジルの製品です。場所が異なることで、素材や調味料、作る人、食べる人が変わると、和食の定義もとたんに揺らぎ始めます。

サンパウロで移民の俳句に出会った時、私はまさにピラルクーの刺身のよような不思議な感覚に襲われました。ブラジルには、日本語で季語のある五七五の俳句を詠む移民がたくさんいます。俳句の結社もありますし、邦字新聞には俳句欄もあります。まるで日本と同じです。しかし、その俳句をよく読むと、「ベンテビー（鳥の名）」「イペー（花の名）」など知らない動植物の名前や、「カフェー植う」「タイヤ冷す」のように日本の季語（苗木植う、馬冷やす）からの転用でブラジルの生活を捉えた季語があります。

また、ポルトガル語で詠むハイカイ（ポルトガル語の俳句）もあります。しかも、本格的な歳時記を作り、季語のあるハイカイを作るグループまであ

第12章

ボリビア日系社会の言語 接触と混合言語

ダニエル・ロング

キーワード

中間言語、母語干渉、言語転移、移民、九州方言

1 はじめに

南米日系人コミュニティのポルトガル語（あるいはスペイン語）と日本語の「コードスイッチング」（以下「CS」）に関する研究が多く行われています。一方、筆者は1997年から20年以上小笠原の欧米系島民の二言語状況（英語と日本語）を研究しています（ロング1997）。小笠原の場合は、単なるCSとは言えません（ロング2012）。日本語や英語、スペイン語、ポルトガル語など、どの言語においても規則があって、母語話者ならば「文法性判断」が可能です。小笠原欧米系島民に、他のコミュニティ（東京のインターナショナル・スクールの学生など）で使われている英語と日本語の混合文を聞かせると、「その言い方をmeらもする」とか「そういう混ぜ方はsound funny だじゃ」といった声が聞かれました。このような状況から筆者は「小笠原混合言語」という名称を提唱して、一つの言語体系としてその研究を進めてきました（ロング2018）。

筆者は2017年9月にボリビアでフィールドワークを行い、日系人同士の談話データを録りました。その文字起こしを行い、小笠原混合言語と比較しました。ボリビア日系人同士のCSには、単なるCSを越えた規則性が存在するという仮説のもとで分析します。

第13章

昆布に分散化された アイデンティティ

尾辻恵美

キーワード

場所のレパトリー、分散化されたアイデンティティ、
ポストヒューマニズム、ポスト構造主義

1 はじめに—日本横丁—

「この棚の食材を見ていると、母がまだそこにいるような気がするんです」。2021年12月初旬に筆者が店に訪れた時、姉川商店の今のオーナーのペンさんが、前オーナーで母親である故姉川暁子さんのことを思い起こしてつぶやきました。

この姉川商店は、シドニー北部のアーターモンという駅を出たすぐ右にある日本横丁のようなところにあります。25年ほど前に、最初の日本系の店「ラーメン元気」ができたあと、自然発生的に日本の食材店、日本の古本屋、寿司屋などの店が集まってきました (Pennycook & Otsuji, 2015)。姉川商店のオーナーも、ラーメン元気の当時のオーナーに誘われ、店舗をそこに移してきました。当時は治安が悪い地域で、スリなども多かったようですが、今では歩行者専用の広場のようになっていて、週末はラーメンや寿司を食べたり、日本の雑貨店で買い物をしたりする人でにぎわっています。この景観は白豪主義¹であった頃とは打って変わっており、いまや日本食は豪州では日常的に食されているため、「日系」だけではなく、様々な背景を持つ人が訪ねてきます。多様な歴史、ことば、人、そして食材などのモノ、そして、匂い（ラーメン、カレー、コーヒーなど）がその場所に入り混じって

1 1901年から1973年まで豪州で執行されていた白人至上主義の移民政策。

第14章

さまよ 彷徨える文化、言語、 アイデンティティ

岡田浩樹

キーワード

文化相対主義、グローバルヒストリー、共在、コンタクトゾーン、
トランスカルチャーレーション

1 はじめに

一般に、文化人類学者は、「異文化理解」を目的として掲げ、自らと異なる「他者」＝異文化を対象化し、理解しようと試みます。人類学者にとって「文化相対主義」は、自分たちとは異質の文化をもつ他者について、独自の価値をもつ対等な存在として認め、自分たちと他者の間について優劣をつけるのではなく、自分たちの価値観で他者を判断しないという姿勢を意味します。グローバル化が進展する今日、越境、移民、社会の多文化化の理解、さらに言語教育や支援に関わる際の「常識」になっていると言えるでしょう。

本書で取り扱われているテーマやトピックにおいても、「文化相対主義」の立場に立ち文化の多様性を認めた上で、どのようにことばや文化の教育を行えばいいのかという真摯な姿勢は共通しています。確かに文化相対主義は、文化の多様性に私たちが直面し、それを理解し受け入れようとする際に、出発点となる視点と言えるでしょう。

この「文化的相対主義」は、19世紀の社会進化論に対する批判として生み出され、その後第二次世界大戦後には多分野や社会に広く普及し、文化の多様性における文化、ことばやアイデンティティなどの問題、あるいは多文化主義をめぐる研究や実践の上で大きな影響を与えてきました。この「文化相対主義」の価値観は、グローバル化が進展する現在、ヘイトスピーチに代表される差別や偏見に対抗する際の姿勢としてむしろ重要性が高まっています。